

平成 26 年度末に派遣を終了した大学院派遣教員に係る実践研究報告書

高知県立安芸桜ヶ丘高等学校 教諭 嶋崎京都

1. 研究の成果と課題をふまえた平成 27 年度の実践内容

(1) 大学院における研究の成果と課題

1) 研究の成果

ユニバーサルデザイン (UD) を授業に導入することの有用性を、主にパワーポイント (PPT) での振り返りや単語カード、教具の工夫によって検証した。口頭による説明よりも短時間にピンポイントで前時を振り返ることができるPPTは、その後の本時の学習に入る際に内容がより理解しやすいことと、毎時間少しずつ内容を確認していくことでスモールステップによる用語の定着ができたことが効果的であったと考える。単語カードは手軽に復習できる学習法として勉強の手法が増えた点で効果があったと考える。また、その他の工夫として行った、指示や教具の工夫などは、生徒が「何を、どこを学習しているのか」を聞き逃しても、忘れても黒板を見れば一目でわかることで安心感が得られたり、何についての説明なのかを黒板に貼られた教具で即座に確認できたりすることで授業についてこられる点で有効であったと考える。

2) 研究の課題

この研究においては成績上位層にその効果が高かった。一方で単語カードにおいては、手つかずの生徒もいたことから、意欲的に学習に向かえる工夫や個別指導も今後の視野に入れつつ、さらなる授業のUD化が求められるのではないかと考える。また学校の規模にも大きく左右されるところである教育施設の向上は必須である。ソフト面、ハード面の両方を一層推し進めることでUDに基づいた授業を一層加速させていくことが、生徒の「分かる」「できる」を多く生み出す一つの方策であると考えます。

3) 平成27年度の実践内容

本年度は異動に伴い、これまでの実践を自らが十分に生かしその効果を検証するには至らず、主に特別支援教育学校コーディネーターとしての仕事を中心となった。本年度、重点を置き取り組んだのは次の2点である。1点目は昨年度のUDの実践報告、2点目はアセス (ASSESS:Adaptation Scale for School Environments on Six Spheres) における生徒支援である。

まず1点目は、昨年度の実践報告を行う機会を得て、全日制だけでなく通信制や単位制などより多くの先生方にUDの有用性について説明することができたことである。校内ではコーディネーターとして、授業のUD化とはどのようなものであるかの校内研修を企画し、先生方が日頃取り組んでいることそのものに実はUDが含まれていることまた、それらを意識的に行うことでより多くの生徒が学びやすい環境になることを確認した。授業においては、初めての専門高校で学力にもばらつきが見られたため、で

きるだけ具体物で学習内容を示すよう努めた。1クラスを2人の教員で別教室において受け持つため昨年度までのICT活用ではなく、教具での工夫が主なものとなった。以下に具体例を示す。

①プリントの工夫

担当教科である国語における古典分野の古文や漢文は、生徒にとっては主語が判別しづらかったり、外国語のように感じてその嫌悪感で嫌気がさして内容理解まで至らなかつたりすることが多々ある。そこで、まとめのプリントに漫画教材を用いて内容確認を行った。漫画では登場人物の容姿が一人ひとり異なるため、誰の動作なのか、セリフなのかが見分けが付きやすい。また生徒も文字だけの現代語訳より漫画のほうがストーリーを追いやすく内容理解のまとめが高まった。

②ノート工夫

ノートテイクの軽減のため、またプリントの紛失を防ぐため国語科では1・2年生の国語総合の授業においてはノートに貼れるB5サイズのプリントを用意している。漢文であれば、1枚のプリントで本文、書き下し文、訳、メモまでがそれぞれ決まった枠内に書き込めるよう設定されている。また古文も同様にし、特に重要古語などの核となる部分に重点を置いて書き込みができるようにしているほか、空欄に番号を振ったり傍線で区切りを入れたりして、答え合わせの時に生徒が迷わないように工夫をしている。書き込んだプリントは失くさないよう各自が糊で貼りノートが完成する。

2点目は、昨年度の研究で活用した生徒理解のツールとしてのアセスを本年度よりQ-Uに変えて活用し、生徒支援を行った事である。アセスの概要やその見方を校内研修を通して周知するとともに、支援を必要とする生徒の個人票を使い、どのようなサポートが必要となるかを話し合った。専門科の教員がそれぞれの科の生徒だけを理解するのではなく、学校全体ですべての生徒の様子を把握し支援につなげられるよう、全校生徒の顔写真を配布した。また、ここでの周知が本年度の生徒サポートにおける素地の役割を果たした。

2. 平成27年度の実践の成果と課題

本年度は昨年度のUDに基づく授業の実践を広報することによって、多くの先生方にその有用性を知っていただけたことが大きな成果の一つではなかったかと考える。またアセスを実施し全体に周知することで生徒理解のための芯を全教職員で持つことができたことは生徒の支援の第一歩になったと考える。課題としては、UDを生かした授業のバリエーションの提示が不十分であったことである。校内研修等を通してさらにその活用法を周知するとともに、本校に有用なUDを学校全体で推し進めていくことが課題である。また、アセスにおいてはその日常的な活用に至っていないことが課題である。教職員一人ひとりがその読み取り方に習熟し、目の前の生徒に対して授業や日常生活のかかわりの中で生かせるような運用方法を提示していくことが課題である。